

会津の歴史シリーズ



第8回 会津の歴史⑦ (戊辰戦争)

中岡 進 (なかおかすすむ)

若松城天守閣郷土博物館
副館長・学芸員



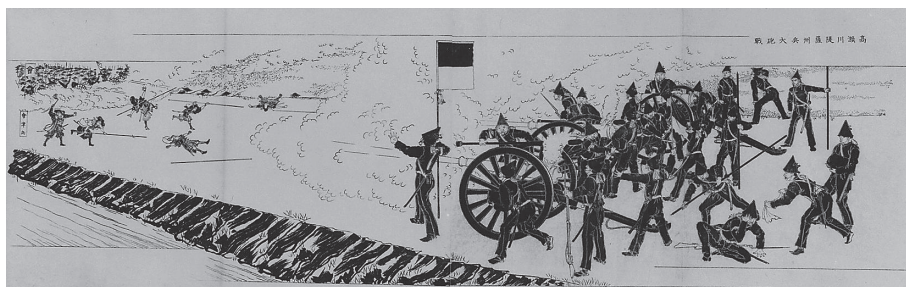
◆「勝てば官軍」

前回お示した通り、今回は特に戊辰戦争だけを取り上げる。

平成25年の大河ドラマ「八重の桜」では、会津の幕末の政治選択や戦いの様子が、あらためて日本の中に広く紹介された。現在の日本史、学校の授業で習うところは明治維新によって近代国家が成立したことを正史としている。「勝てば官軍」の言葉が示す通り、戦争で勝った方が正義であり、負けた方は悪というレッテルが貼られる。もちろんそのことを否定的に言うつもりはない。義務教育などでの日本史では、おそらく会津の抵抗などあまり触れないで授業が進められることだろう。したがって大河ドラマのような注目度の高い

メディアで会津側からの視点で幕末を描くことは、とてもありがたいことだ。近年ネット上などで、会津は「先人の誤った生き方やその屍しかばねを材料に金儲けに走る賤しい集団（地域）」などという評価がなされたり、そのことが堂々と論文の形で発表されたりしている。もちろん会津人として反省すべき点もあるだろうが、すべてを「否」として受け入れるつもりはない。会津の歴史として主張すべきところは、恥じることなくその姿勢を貫くことが会津の歴史を生業（なりわい）とする者にとっての「正義」だと思うからである。

本来の歴史の話からずれてしまったので軌道修正を。戊辰戦争は「新政府軍」と「旧幕府軍」との戦いと言われている。注目すべきは「旧」と冠



高瀬川隄の攻防（「戊辰戦記絵巻」より）

せられていること。つまり、戦いの結果、幕府側が負けて政権を譲ったのではなく、すでに新政府が成立しているの戦いだった。それでは何のために戦ったのか。これについては論が分かれるところである。抵抗を続ける会津藩などを壊滅させるためだったとか、あるいはすでに恭順の姿勢を見せていたのにそれまでの京都時代などの恨みを募らせた長州藩がこれを認めなかったとか、あるいはひそかに皇族の一人（輪王寺宮^{りんのおうじのみや}）を帝にして東北地方を独立国家として建設しようとしていたとか。しかしながらおそらく戦場のレベルでは、どちらも「攻撃されたから反撃した」の応酬だったであろう。

◆戊辰戦争勃発

戦いは、京都郊外の鳥羽・伏見で始まった。旧幕府側は数的にも不利で、戦闘のスタイルも会津藩を中心とする旧幕府陣営はむかしながらの「いくさ」をしていたのに対し、新政府側は導入したばかりの西洋の新式銃を主力とした近代戦争の準備が整えられていた。したがって、「人」対「人」の^{はくへいせん}白兵戦に持ち込みたい旧幕府側だったが、組織された砲撃の前に近づくこともままならなかった。戦況が徳川慶喜^{とくがわよしのぶ}の元へ報じられた際、会津の重臣である神保修理^{じんぼしゆり}が陣形の立て直しを図るために退却を建言した。すると慶喜は、松平容保^{まつだいらかたもり}・定敬^{さだ}兄弟を連れて大坂から江戸へ向かうという行動に出たのだった。総大将不在の知らせを受けると旧幕府軍は総崩れとなり、散り散りに退却するしかなかった。

江戸に戻った慶喜はそのまま謹慎することを表明し、容保も隠居の身になって国元へ帰ることとなる。遅れて関西から引き揚げてきた会津藩士たちは、慶喜らの行動に納得がいかず、神保修理が慶喜らをそそのかしたとの結論に至り、非難が集中した。容保は、ひとまず事態の収束を図るため、苦渋の選択ながら修理に自害を申し渡すこととなった。しかしこのことが会津藩士たちの団結心を高めることとなり、会津へ帰ると軍制を改革



白虎隊自刃図（渡部菊二画）

して次の戦いに備えることにした。ここで誕生したのが白虎隊であり、そのほか朱雀^{すざく}・青龍^{せいりゅう}・玄武^{げんぶ}という、年齢別の隊構成へと変更した。後に有名となる白虎隊もこの時誕生したが、そもそもは鳥羽・伏見での敗戦を踏まえての大改革だった。一方で見落とされがちなのが、京都での戦闘で山本覚馬^{やまもと かくま}が捕えられ、さらに神保修理も失ったことで、会津藩の中で西洋の軍事状況をよく知る二人を欠いたことになり、のちの戦い方に少なくない影響を及ぼしている。

白川から平、二本松と徐々に会津に迫る新政府軍は、8月21日に会津領へ進攻してきた。会津藩は、当時の主要街道である、白川から猪苗代湖南岸を通るルートからの攻撃に対する守りを固めていたが、新政府軍は北の母成峠^{ぼなり}から攻め込んできた。ここは旧幕臣の大鳥圭介^{おおとりけいすけ}が率いていたが、あっけなく突破を許してしまった。松平容保は滝沢本陣まで出陣していて、そこに随行していたのが白虎隊などの予備隊であった会津藩は、想定外の攻撃に退却を余儀なくされた。残念ながら白虎隊の戦力では、敵の進軍を止めることはできなかったのであった。主力兵を各方面へ送り出していた会津は、敵の急襲に対して兵を呼び戻すとともに、非戦闘員も城内へ引き入れて籠城の態勢に入った。ここで、非戦闘員は足手まといになりかねないとして、自害する婦女子が各所で見られた。

8月23日には内堀付近までの進入を許したが押し戻し、以後は外堀をめぐる戦いとなった。な

んとか地上戦に持ち込みたい会津藩であったが、徐々に運び込まれる銃砲類が新政府軍の攻め手を増やし、城外からの砲撃が籠城する会津藩の人々を苦しめることとなった。そしてちょうど一か月が経った9月21日に容保は降伏を決意し、翌日鶴ヶ城北出丸には「降参」と書かれた白旗が立てられ、追手門前で中村半次郎^{なかむらはんじろう}らを代表とする新政府軍の前に、容保らは正式に降伏を表明した。このとき地面に敷かれた緋毛氈^{ひもうせん}は、会津の屈辱を忘れないようにと多くの藩士たちが少しずつ切り取って懐にし、「泣血氈^{きゅうけつせん}」と名づけられるようになった。

一か月に及ぶ籠城の末に城から出てきた人数は五千人余り。城内で亡くなってしまった人や城外へ逃れていった数は不明である。容保らは妙国寺で謹慎した後、江戸へ送られた。会津藩としての責任を取ることは、家老上位3人が自害することになったが、すでに戦闘で田中土佐・神保内蔵之助の両名は戦死しており、最終的に萱野権兵衛^{かやのこんべゑ}一人が責めを負う形となった。また、松平家としての領地は没収され、会津の人々も捕虜のような形で捕らえられていたが、翌年暮れに新たに斗南（現在の青森県東部）を領地として松平家の再興が認められ、領民たちも新しい土地へ向かって移動していったのだった。

◆白虎隊逸話

最後に、前稿で「白虎隊が有名になったのは…」

と書いたが、これは軍国主義に傾注しようとする近代日本の軍部の思惑によってなのである。たしかに少年兵たちが集団自決してしまったことは悲話には違いないが、きちんとした形で墓地が整備されるのは明治17年以降のこと。それまでは地元でも大きく語られることはなかった。少年たちの悲劇といえば二本松少年隊の方が幼かったし、白虎隊がさほど戦功を挙げた訳でもない。しかし国のために命を捧げるという姿が、近代国家としての日本の軍部においては、恰好の宣伝材料となったのである。まして軍部の中枢は戊辰戦争当時会津を攻撃した藩の出身者が代々多くを占めていたため、ここで敵だった会津からヒーローを仕立て上げるといふところの効果も期待したのではなかったか。このことにより白虎隊の存在は日本中に知られることとなり、イタリア大使を通じて当時の首相であるムツソリーニに白虎隊自刃図が贈られたり、飯盛山にはイタリアやドイツから顕彰碑が贈られたりしたのだった。もっともこれらは太平洋戦争が終わると、軍国主義の象徴だとして撤去させられたりした（のちに再建）。

※白兵戦^{はくへいせん}：刀剣や槍などの近接戦闘用の武器を用いた戦闘のこと。弓矢などの射撃武器や投石器などの投てき武器を用いる「遠戦」の、また近代戦における鉄砲などの火器を用いる「火戦」の対義語となる。



錦絵「会津軍記」